

年か上です」と述べ、後に1880年東京を訪問した時に「東京のドイツ人社会はかなり大きいです。ベルツはドイツ人社会で抜きん出た地位を占めています」と評価した。本書では「ベルツの出迎え」、「ベルツ京都訪問」など8通以上の書簡にベルツの名が上っている。1879年11月17日の手紙にベルツが上洛時、二人は出会い何日間を共に過ごした、という記載を見た時は心が躍った。ベルツ側の資料では一切記載されていない新事実である。

脚気研究と寄生虫研究はショイベの業績の代表的なものである。手紙では脚気研究に言及する部分は多い。1878年2月17日の書簡で、「日本人自身が自分たち自身の事情に決定的に通じていない

のです」と述べ、日本人論を展開している。脚気の場合も同様、と述べ、日本人にしか見られない脚気について日本人は詳しくない、と記す。さらに母親の質問に答える形で、脚気は日本の大都会の若い人たちを冒す病気として説明している。その後帰独途中1882年バタヴィアに寄港、脚気の症例に接し精力的に研究を続けた様子を伝えた。

本書は、ショイベの得難い第一級の新史料である。今後ショイベ宛ての母親からの返書が発掘されれば公開を期待したい。

(山上 勝久)

[思文閣出版、〒605-0089 京都市東山区元町355、
TEL.075(751)1781、2011年6月、A5判、346頁、
7,000円+税]

青柳精一 著

『近代医療のあけぼの——幕末・明治の医事制度——』

わが国の医学の歴史の中でも、幕末から明治にかけては、ひととき興味深い時代である。19世紀に入って、それまでの漢方を中心とした医学に少しずつ蘭学が浸透していた。そこに幕末の動乱が加わり、西洋医学の導入が一気に加速される。幕末には長崎でポンペによる医学伝習が行われ、明治になると大学東校（現在の東京大学医学部）にドイツ人教師が雇い入れられ、ドイツ医学が本格的に導入され、卒業生たちによって全国に広まっていく。医制によって医師の資格制度が定められ、医術開業試験が開始され、続いて医学校の整備が進められていく。明治末には、帝国聯合医会と明治医会が長年にわたり対立続けた末によりやく医師法が成立し、医術開業試験が廃止されることになる。

本書『近代医療のあけぼの』は、ひととき光彩を放つこの時期の医学の歴史を飾るさまざまなエピソードを一つ一つ取り上げ、豊富な資料に基づいて紹介したものである。どのようなエピソードが取り上げられているかは、目次をみると分かりやすい。

第一章 序論

- 第1節 幕末期の蘭医学の交流と高階安芸守の建白
- 第2節 ベリーの来航と堀田正睦の開国論
- 第3節 各国との修好通商条約の締結と遣米・欧使節団
- 第4節 松木弘安、福沢諭吉らの「夷情探索」——医療施設について
- 第5節 幕末海外に渡航した医師たち
- 第6節 蘭語に代わる英仏露語の台頭と各種辞典の出版

第二章 明治新政府の発足とその医事政策

- 第1節 あたらしい政治体制の確立
- 第2節 明治初期の医界の動きと二つの医学校
- 第3節 ドイツ医学の導入
- 第4節 お雇い外国人医師の来日
- 第5節 海外留学生制度で渡航した留学生
- 第6節 「医制」の制定と長与専斎
- 第7節 明治初期の開業医師と医学校（塾）
- 第8節 各種医師団体（結社）の誕生あいつぐ
- 第9節 医術開業試験と漢洋医学闘争

- 第10節 病院の拡充と入院料金
 - 第11節 女医の登場とその活躍
 - 第12節 東京医学校から東大医学部へ
- 第三章 明治中期の医事問題
- 第1節 東京大学医学部の発足と邦人教授の誕生
 - 第2節 医学教育制度の推移と“医籍”の登録
 - 第3節 二つの医学校——済生学舎と成医会講習所の明暗
 - 1 済生学舎
 - 2 成医会講習所
 - 第4節 コレラの流行と国内の防疫体制の整備
 - 第5節 衛生行政組織の整備にともなう医会の結成
 - 第6節 薬律の制定と医薬分業の抗争
 - 第7節 開業医制の定着と医療費の動き
 - 第8節 近代的な看護婦の養成はじまる
 - 第9節 軍隊と脚気——兵食論争について
 - 第10節 国家医学会と国家医学講習料
- 第四章 明治後期の医事問題
- 第1節 日本医学会と日本聯合医学会
 - 第2節 医師法制定までの長い道程
 - 1 大日本医会の創立と「医師法案」
 - 2 第一三帝国議会に提出された「医師会法案」
 - 3 明治医会も「医師法案」づくりに
 - 4 関西聯合医会の設立と帝国聯合医会の結成
 - 5 議会上に上程された二つの「医師法案」

第3節 医師法制定後の医界事情

- 1 医師会創設時の医療料金
- 2 医弊を嘆いた二人の医師
- 3 学制改革と学卒医師の増加

著者の青柳精一氏は、1924年生まれで、朝日新聞の科学部・社会部で記者を務め、『科学朝日』編集部などを経て医学専門誌『モダン・メディシン』の編集長を務めた。定年退職後に日本医師会に務めて、『日本医師会雑誌』に「日本医師会小史」を連載するなど、医学史関係の執筆活動を続けている。『診療報酬の歴史』（思文閣出版）を1996年に出版しており、今回は15年ぶりの著作になる。

本書には、医療や医学の歴史の流れについて著者の独自の見方を提示するという押しつけがましさがない。親しみやすい話題を取り上げるところ、簡明で読みやすい表現をとっているところに、読者を大切にするジャーナリストらしきがあふれている。

歴史というのはもともと、過去の人物や出来事について知りたいという素朴な欲求から始まるものであろう。この著作はその原点に立ち返って一つ一つのエピソードを丹念に掘り下げている。好感のもてる一冊である。

（坂井 建雄）

【思文閣出版、〒605-0089 京都市東山区元町355、TEL. 075(751)1781、2011年6月、A5判、576頁、4,700円＋税】

廣川和花 著

『近代日本のハンセン病問題と地域社会』

山あいの地とおぼしき木造建物の二階窓越しに、カメラの方に向かって楽しそうに、幸せそうに微笑んでいる数人の若い女性たちの姿をとらえたセピア色の一葉の写真——本書をはじめて手にとった者は誰もがまずこれに目をとめるであろう。建物は群馬の温泉地・草津の一角を占めた聖

エリザベス館、女性たちは同地で暮らしていたハンセン病の患者さんである。一見何気ないスナップ写真であるが、評者は、表紙を飾る一枚としてこれをあえて選び取った点に著者の慎重なメッセージと戦略を読み取る。というのは、この〈微笑み〉は、これまで数々の文学・文芸、ルポルター